

それでは、今日学ばせていただきます「正信偈」の原文と現代語訳をご一緒に拝読させていただきます。お手元のテキストの九頁の一行目ですね。ゆっくり読みますので声をお出しください。

能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃

本願を信じ喜ぶ心が、ひとたびわが身におこるとき、
煩い悩みを断たなくても、
この上ないさとりを得ることができます。

あつという間に暑い夏も過ぎ、もう十一月でありまして、報恩講の季節を迎えたことでございます。ご承知のように親鸞聖人は十一月二十八日にご命終なされたのでありまして、京都の真宗本廟においては、二十一日から二十八日まで報恩講が厳かに勤まることでございます。

只今はご住職様のご導師の元で親鸞聖人がお作りになられました「正信偈」をご一緒にお勤めさせていただきました。親鸞聖人が九十年のご生涯をかけて作られた『教行信証』は、真実の教え（教巻）、真実の行（行巻）、真実の信心（信巻）、真実の証（証巻）、浄土（真仏土巻）、それから真理がまことでないならば、仮の浄土に生まれる（化身土巻）ということが説かれております。

その『教行信証』の行巻には、南無阿弥陀仏が浄土に生まれ往く真実の行であって、一切の人々に平等に与えられておる教えであるということが表わされております。その一番、最後に「正信念仏偈」が歌われております。

「正信偈」は、親鸞聖人が浄土真宗の依り処とされました『大無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』のおところが前半に説かれ、後半には、インド・中国・日本の七人の高僧の方々が教えを伝承してくださったということが書かれております。高僧と申しますのは、平たく言えば、まことの教えに生きる念仏の代表者ともいうべき人であります。

仏陀釈尊を初めとして、身と心を挙げて、身命を省みずして、生きて相続してくださった。そういう教えを今の時代で私たちが聞いていくことができるということは、本当に大きな喜びであると教えられます。今日、初めて参加して下さった方もお二人程おられるということで、大変嬉しく存じます。

初めにいつものように、最近触れたことの中で感銘を覚えたことをお話しさせていただきます。お配りさせていただいた新聞のコピーですね。十月二十四日の朝日新聞の夕刊に掲載されていたものです。

「僕らの軌跡（あしあと） 19の軌跡（きせき） 忘れちゃいけない」。軌跡ということをおこの方は二通りに読んでおられます。言葉としては“きせき”と読むわけですがけれども、軌跡は足跡なのであります。足跡という時には、私がまず思い浮かべますのは、一步一步の足跡ですね。それは人間の足跡であり、私たちが生きておるといふ、その足跡がそこに記されているのであります。この作者が“きせき”と“あしあと”というふうに二通りに読んでおるといふことは、大変意味があると思ひます。

この19の軌跡というものは、七月の末に、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で働いていた植松聖という人が、「障害者の方は生きていく必要がない」と、19人の命を殺したということがありました。そのことを非常に悲しんでね、歌に込められたということがあります。新聞記事を読ませていただきます。

「僕らの軌跡（あしあと） 19の軌跡（きせき） 忘れちゃいけない」

「僕らをどうして不幸せと、勝手に決めるのか？」——。相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で7月に殺傷事件が起きた後、重度の身体障害があるさいたま市の女性が歌を作った。タイトルは「19の軌跡」。亡くなった19人に自分の思いを重ねた。

難病の脊髄性筋萎縮症のため、車椅子で生活する見形信子さん（47）。障害者の自立を支援するNPO法人に勤めている。事件後、「自分たちにもできることはないか」と、中学校教諭の新島茂男さん（57）＝埼玉県川越市＝と19行の詞を書き上げた。

事件から2週間後の8月10日。山あいにある施設の献花台を訪れ、「やっぱり、ここも同じだ」と思った。「ほとんど知られていないような場所で暮らしていたんだなって。自分の過去がフラッシュバックしてきた」。花を供え、新島さんと園に向かって歌った。

見形さんは生まれつき、手のほかはほとんど動かない。小学校には通えず、12歳で施設に入るまで、多くの時間を家の中で過ごした。人に会うこともなく、客が来ると2階に上げられたこともあった。「大人の話に入らないよう配慮してくれたのかもしれないが、隠されたように感じた。今も振り返ると悲しい」

神奈川県警は今回の事件で、「遺族からの強い要望があった」などとして、亡くなった19人の氏名を公表してない。見形さんは、「障害のある子どもがいる親への偏見や圧力が、数十年経ってもあることに憤りを感じる」。

「僕らの人生（いのち）はかけがえないと、みんな気付いてよ」「こんな過ち 繰り返さないで」。歌詞には、生涯をおとしめる発言を繰り返した植松聖容疑者（26）＝鑑定留置中＝への反論も込めた。「『悲惨な事件』で終わるのではなく、一人ひとりがこれからも事件のことを考えてほしい」と願う。

「19の軌跡」の歌詞

僕らはちゃんと生きてきたよ
ちゃんと夢だって見ていたよ
風や空や海だって感じる事ができたのに
僕らをどうして不幸せと、勝手に決めるのか？
僕らの軌跡（あしあと）消さないでよ 19のかがやき
19の強さ みつめてよ
僕らのそばにはやまゆりが
いつもそよそよ揺れていたよ
気高さあrawす花のように僕らの誇りもそこにある
僕らの軌跡（あしあと）消さないでよ 19の気高さ
19の強さ 讃えてよ
僕らはきっと礎になる こんな過ち 繰り返さないで
怒りも くやしき 悲しみも 僕らが残した軌跡（あしあと）だから
僕らの軌跡（あしあと）消さないでよ 19の心
19の強さ 感じてよ
いつまでも決して消えることない 僕らの軌跡（あしあと）
19の軌跡（あしあと） 忘れちゃいけない

人間は、人様の姿をちょっと見ただけで、外見だけで気の毒な人だということを安易に決めてしまうということがございます。それは一部の人だけではありません。私たちの中にそういう心がないかということが、私は問いかけられていると思います。

また、障害者という言葉なのですが、私は大変不十分だと思うのです。身体障害者と言いますが、障害者というと全体に障害があるような印象を与えかねない。私は不自由という言葉が当てはまると思うのです。身体が不自由であるということは、人間、縁があれば誰の上にも起こることです。障害というと損なわれたというような印象を与えてしまいます。馴染んでおる言葉にも、大変強烈なインパクトのある言葉がたくさんあると思います。私たちが念仏の教えを教えられるときに、やはりおかしいなと気付かされてくるということがあります。

見形さんの子どものお話を読んでおりました思い出したのは、私たちが尊敬しております高山出身の中村久子さんという、もう亡くなられて久しいのですが。幼い時に両手両足を突発性の脱疽で失われて、ダルマ娘と呼ばれて、大変厳しい生活の中から念仏の教えに出遇われた方です。晩年はヘレンケラーさんにも会われて、多くの方々に影響を与えられた。その中村久さんが幼い時に、お客さんが尋ねてくると押入れの中に隠されてしまって。手洗いにいきたいのに行けないということがおありになったそうです。

中々人間の世界というのは厄介だなと思います。偏見という差別感情というのが中々根深いものだなということを知られるわけでございます。亡くなった方の名前を公表されないということも、これはこれでいいというような問題ではなくて、もっと大きな問題を孕んでおることだと思われれます。

私はこの歌詞の中で、「風や空や海だって感じる事ができたのに」という言葉が、大変鮮烈な印象を受けました。私自身も十代の後半は、生きるか死ぬかということを考えて、「生まれて来ないほうがよかった」と思っておりました。そんな時に瀬戸内海の海岸をよく歩きまして、風や海や空や波や、そういったものにどれほど癒され、励まされたかわかりません。私自身、今日こうして皆様方にお会いできるということも、そういったものを感じるといふ人間のいのちをいただいでいなければ、会えなかったに違いないと思うことでございます。

この19人の殺された、いわゆる障害者の方々。その方々をかがやきと表現されたということは、並々ならない表現ですね。状況は不自由であって、厳しくてもいのちをいただいで生きることに、誇りがあるのだということをお訴えおられると思いますね。この歌詞は、この方の全存在を挙げた絶唱ですね。身体的にも精神的にも、ごく普通の健常者と呼ばれるような状況を与えても、いささか辛いことがあったら、「なんで生まれてきたか」と言ったり、「死んでしまった方がいい」と言ったりする。そういう人間存在の中で、こういう不自由な身体を受けながらも、本当に人間の深い所からの叫びが表現されたということは、大変私は有難いなと思います。

これは歌でございますが、私たちが先程お勤めさせていただいた「正信偈」も歌なのです。偈ということは歌である。偈頌と申しますが、偈頌というところには感動。全存在を挙げて讃えずにはおれない、あるいは悲しまずにはおれない。頭の理知的な小賢しい作品じゃなくして、全存在を挙げてその感動を歌い上げずにはおれないというそういういのちが輝いている、響いている。

したがって私たちが「正信偈」をいただくということは、親鸞聖人ご自身が九十年のご生涯において、仏陀釈尊の教えに遇い、七高僧の教えに遇い、釈尊の真実を説かれた三部経の浄土を讃えて、浄土に生まれ往く。それほどどこまでも人間の厳しい現実の姿を照らし、その自覚を通して、限りない仏様の世界から呼びかけられる。そして開かれてきた念仏の教えを生きるという、そういう感動ですね。それは歴史や民族や人間の世界のあらゆる相対性を超えてですね。人間の世界はどこまで

も相対であり有限であります。

何故、阿弥陀が浄土かという、絶対無限という。歴史の中に厳然として、真実のはたらきが見えながら、人間は自分たちの身近な欲望、エゴイズム、自我愛。そういったものに閉ざされて、絶対無限なる真実のはたらきが見えなくなっている。だから自分を粗末にし、人様を粗末にする。頭が良いとか何とか、自分を驕ってですね、身体の不自由な人たちを邪魔者にしたり、生きている意味がないと言ったり、更には抹殺してしまうと。

これは身体不自由な方々に対してだけではなく、老齡化社会という大変、文明の恩恵を受けた豊かな社会ではありますけれども、本当の豊かさってというのは何ですか。繁栄だけじゃありません。便利なだけじゃありません。悲しみが大事にされるということじゃないでしょうか。老いれば老いの悲しみがありません。今まで当たり前に出ていたことが出来なくなる。記憶力も衰えてくる。認知症というような問題も出てくると。長年連れ添ってきた連れ合いの顔も、「あんた誰ですか」というようなこともね、あるのです。

有名な丹羽文雄さんがね、晩年に認知症になられまして、奥さんと一緒にテレビに出られていたのですが、奥さんに対して「あんた誰ですか」と言っておられました。他人事じゃないのですよ。自分は何にたくないとどれ程思ってもね、ご縁があればなると。中津功、今日只今こうして皆様方にお会いできてお話をさせていただいておりますが、ご縁があれば、成り得る身であるということをお教えることが、本当の教えなのですね。

絶対になりませんよというのは本当ではないと思います。それは方便ですね。人間の相対有限なご縁があれば、どういう身になるかわからない。そういう生き方を根本から照らし出し、その生きる根拠となる依り処となる、絶対無限の真実の法のはたらきである。法ということを行いましたのは、ダルマ。色もない形もない。言葉を超えておるものであります。しかしそれだけでは感覚のしようがありませんから、言葉に表現し、法のはたらきを表す。それによって初めて真理、真実というものに触れていくことができるという。

だからこの真理、真実の言葉で表されるということは、非常に大きな意味がございます。言葉というのは力を持っております。だから人間を迷わし、傷付けます。目覚めた人の目覚めた言葉はその人自身を目覚ましておるがゆえに、触れた人々を目覚ましていくということが自ずとそこに表現されております。この19の軌跡という歌が歌われるということは非常に深い悲しみ、痛みを通して、ああいのちを戴いて生きておるのだというそういう感動がね、歌い上げられている。

こういう世界に触れますとね、いわゆる不自由な状況を抱えて生きておられる方々は、同情したり可哀想だと言ったり、そういう言葉は全く不十分であると思うのです。人間の言葉の貧しさであって、そういう状況を受け止めて、「よくぞよくぞ、生きておられますね」と、そういうことが自然な感情なのではないでしょうか。やはりどこかで自分は違うのだと、大丈夫なのだという、自分良しとする心があればね、自是非他非ということがある。他人を対象化して見下してしまう。そういうのは本当の豊かさではありません。

私は本当の豊かさというのは悲喜共同する。悲喜というのは、生きる所には必ずあるわけですね。悲しみ、大事な人と別れなければならぬこともあるでしょう。喜び、大事な人と出会うということがあるでしょう。連れ合いに会うとかね、子どもに出会うとか。これも人間の命に伴われておる。それが自分だけの喜びや悲しみでなくして、共に同じ。

こういうことを教えられますとね、今の本当に進んだ時代社会であるけれども、問題はいいよ深いなということがかえって浮かび上がってくるのではないのでしょうか。片一歩ではお金をいかにして使おうか。ヘリコプターを買おうか。何を買おうかと苦心している人がある傍ら、片一歩では今日は何を食べるか。食べる物が無い。そういうことで悩んでおられる方々がいらっしゃる。そ

ういう見つめる眼は絶対無限の妙用に触れると、人間を超えた真実を真実としていただいでいく。そういうものに触れる所に初めて現実が見えてくるということであろうと思います。自分自身が現実の時代社会の中にあるからと言って、よく見えているかということ、どうですか。確かに見えている部分もありますけれども、やっぱり一部分でしかないということではありませんか。

聴聞ということはどうでしょうか。聞いてわかったと頷く。確かにあるし、それが大きな喜びなのですが。そこに留まるものではなくしてですね、やっぱり現在進行形。いのちのある限り、聴聞は終わらない。言葉を変えて言えば、老いれば老いたということにおいて初めて気が付く、出遇う。人間の事実があるのものであるということではないのでしょうか。親鸞聖人は九十歳までご長命であったわけですが、私は大変有難いなと思うのですね。それはやはり老いを生きられた親鸞様が、老いという事実を抱えた人間がいかなるものであるかということをよくよく表現してくださっているということをお教えられますね。

この「正信偈」は、「帰命無量寿如来」から始まりますけれども、これは念仏から始まっておることです。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。思い切って、「人生は念仏から始まる。念仏に遇うという所から本当の人生が始まる」と言っているのではないのでしょうか。本当の人生と言いましたのは、人生それ自身を全面的にいただいて生きていくことができるという意味ですね。

どうしても私たちは都合の良いものと都合の悪いものと、無意識の内に区分けをしておりますね。自分の履歴を語るということがある時にも、恥ずかしいような人に知られたくないようなことをカッコに入れてということが出て参ります。これはやはり人間の領分ですね。人間それ自身を見つめるという「帰命無量寿如来 南無不可思議光」という眼に立つと、人生のすべてがなくてはならないという意味を持ったものであるということをおっしゃっていただくとおっしゃいます。

そして「法蔵菩薩因位時」からは、阿弥陀の浄土、本願の世界というものが讃えられています。「如来所以興出世」という所からはそういう背景を受けて、念仏→阿弥陀の世界→釈迦の教えという順序になっています。一般的な世界から言えば、釈尊→念仏→阿弥陀の世界。そういう順序であります。親鸞聖人は『教行信証』を表す時に、弥陀から始まっているのです。それは根源から始まっているという。だから仏陀釈尊が釈尊になるということは、阿弥陀の本願の教えを表わされたからであるという、そういう大事な意味があります。

「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」。これは

如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんと成り。五濁悪時の群生海、如来
如実の言を信ずべし
(真宗聖典 二〇四頁)

釈尊が現れて、本当に阿弥陀の本願の世界を明らかにしてくださったと。

「五濁悪時群生海」というのは人間の歩みがまさに鋭い言葉で言い表されております。五濁というのは時代の問題。悪時という所には、人間の自覚という問題がそこにあるわけです。五濁というのは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁というこの濁という字が付く。濁ということは濁りを表す。濁っておるということは、自分が見えず、人が見えない。それが自己ですね。人間の自意識ではね、己の意識では知っているのですよ、わかっているのですよ。ことによったら俺ほど物わかりのよい者はないと言いかねない。言わなくても思っているということがあるわけですが。そういう人間の智恵ですね。智恵ということがいかに濁っているかということです。

例えば子どもに対して学校の成績の点数だけで子どもを判断されたら、たまったものではありません。一部分です。全体として、別の言葉で言えば相対として見るということはどうでしょうか。中々できません。劫濁というのはそういう人間が知るといって時代自身の問題ですね。これは非常に

激しいですよ。よく申し上げますが、原爆とか水爆とかをもって形ばかりの平和っていうのは、これは聞じゃないですか。

見濁というものも、人間は色んな自分の都合の良い考え方というものを打ち立ててきて、争うということがありますけれども、そこには自見に執着するという。人様の見解を聞けないという問題がありますね。煩惱ということも我が身が一番大事。煩というのは身を煩わす、そして心を悩ますという。身も心も本当に要求型の、あるいは欠乏型の身である。

最近障害者の方がパラリンピックで義足をつけて活躍しておられます。ある方は「私はもし、もう一度生まれてくることがあっても、こういう身体になることを厭わない」ということを言っておられました。それは本当に不自由な身体で生きることができるという、豊かな意味を見出したという所から生まれてきた言葉ではないでしょうか。そこには満足自体という、初めて自分自身の真実をかけがえのない身として受け入れることができたということでしょうね。やはりそこまでいかなければ、どこかで悲観的な心とかね。同情を待つような心とかそういうものがあって、本当の意味の自在にはならないということがあるのだと思うのです。

まあ人間の煩惱は底知れない。衆生ということは生きとし生けるものでありますが、それも自我中心、自己中心になって、信頼が持てないということがありますね。今度の大統領になられた人（ドナルド・トランプさん）は大きな壁を作るということをね、ああいう表現をしてしまうという。そういう人が通るといような…これは冗談ですよ。人間というのは底知れないものを持っていますね。決して進んだからといって、何もかにも本当の意味で豊かであるかということそうじゃない。聞随分孕んでいるということがあるのですね。

だから肉体的ないのちは長くなってきても、内容的には短小であるという、そういう問題を抱えていますね。人寿短小。人寿短小ということで一番私は辛いのは若い人々の自殺があるということがありますよね。八十とかね、平均年齢は高いのだけれども、自分で自分を殺さなきゃならないという。それはこの時代社会の抱えている問題の深さです。問題の深さっていうことは言葉を変えて言えば、仏法に出遇うと。遇わなければならない、遇わずにおれないという縁が深い。条件が整っているということです。条件が整っているのだけれども、中々遇えないという問題がありますね。

何故遇えないかということやはり先程聴聞ということがありました。中々聞こうとしないということがありますし、聞いても自分に良かれということで聞いてしまうというそういう、自是他非の心が非常に強いということがあることを思わされますね。「唯説弥陀本願海」というのはこのこと一つということですね。人生において最も大切なものは何か。お一人お一人が自分自身に問いかけずにはおれない問題だと思えます。仏陀釈尊、親鸞聖人の教えに遇うと、この唯説ということ「唯説弥陀本願海」という、ただ阿弥陀の本願の教えを説かんがためであるという。

また唯信という、『唯信鈔』ということがありますが、本当の意味の真実信心。現代の言葉で言えば、本当の自覚ですね。信心というのは思い込みじゃありません。思い込みは本当の信心じゃありません。本当の意味の自覚です。それを仏陀が自覚覚他、覚行窮満という。自ら目覚め、他を目覚ましめる。その目覚めのはたらきが極まり満ちるとい。あらゆる存在の上にはたらく。そういうはたらきが仏陀、仏様の。これも覚者という。だから人生において本当に大切なことは何か。このこと一つということね、表わされておりますね。

「唯説弥陀本願海」でしょ。これは誰の為に向けられた言葉ですか。十方衆生なのだけれど、汝自身。あなたっていうことですよ。あなたっていうことは仏様から、よき人から私をあなたと呼ばれておる。これは非常に大事な意味ですね。我と汝という哲学者の言葉もありますけれども。汝と呼ばれている、あなたと呼ばれているのですよ、私たちが。聞法するたび、あなたと呼ばれている私であるということに初めて気が付いてくるという。だからあなたと呼ばれることにおいて、いわ

ゆる孤立無援のそういう孤独感が破られるわけですよ。孤独を貫いて一人であるあなたにあなたと。汝、まことに生きようとする者よと。これは如来様の阿弥陀の人間をみそなわす眼ですね。あなた本当に生きようとするのなら、という。そういうものが呼び起こされる。そのこと一つが呼びかけられる。

そしてですね、これは人生の方向ですね。どこから生まれてきてどこへ行こうとするのかという。そんなに一生懸命に働いて、汗水垂らして働いて、どこへ向かって生きておるのですかと。これは私たち一人ひとりに対する問いかけですね。教えの言葉としては、私たちはもう聞いているのです。お浄土という言葉でね。必至滅度の願という。必至っていうのは必ず至る。滅度というのは煩惱、煩悩、悩み、自分を妨げ、人を妨げるようなそういうふうな障碍から解放されたお浄土。滅度ということは大涅槃。必ず滅度に至るといふ。そういうね、根本的な方向。これが教えられるわけです。

だから「死んだらどうなりますか」というような問いがありますが、灰になるとかね、お骨になるとかそういう言葉は本当に荒唐無稽な。私は不十分な、荒っぽい表現だと思うのです。真宗門徒の間で言われて親しまれてきております、先立って行かれた方々が帰っていかれた世界。浄土に帰るのであります。これは大変な言葉じゃないですか。帰るといふ。死ぬということとはただ亡くなるというのではなくして、帰る。帰っていける世界。釈尊の帰られた世界、親鸞の帰られた世界、七高僧の帰られた世界。私たちが出遇うことのできたよき人々の帰っていかれた世界。その世界に私たちがまた帰っていくことができるのであります。これは大涅槃の世界、お浄土の世界。そういう人生の方向性がね、与えられていると。これは大変なことですね。

群生海という、海という言葉もまたこれは目を見張るような言葉ですね。人間の悩んでいる世界が群生海、海のように広く深い。その中の私も一人であるという。その群生海を尽くして底の底まで徹底して助け遂げずにはおかないというのは、阿弥陀の本願であるという。

私たちは自分の苦悩ということもね、矮小化するということがありますね。当座の問題をそれなりに解けばそれでいいやと、そんなもんじゃないですよ。生きている限りいのちをいただいて生きておるといふことは、やはり問いが深いということだと思えますね。罪悪深重ということ、問題が深い。いのちある限り問題を抱えておる存在であると。

問題が深いということは光が深いということです。光が尊いということです。深い所までさしこんでくるわけですから。闇の底まで照らす。それが光です。闇の底まで照らさないようなのは人工的な光です。如来の光は闇の底の、底の底まで照らすと。肉体的な表現をすると、骨の髄の髄まで照らすという。単なる同情じゃないのですよね。本当に悲喜共同という。そしてですね、行方、方向。「正信偈」をいただく時ね、現代の言葉で言えばそういうことがね、問いかけられておる。ここに道がありますということをお歌い上げられておると思えますね。

今日の所、「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」。一念喜愛心ということは真実の信心ということですが、信心ということに尽きましても喜愛心という表現で。この能発という言葉もこれも凄い言葉です。私はこの言葉に触れますとね、本当の意味の能動性ね。主体性と申しますか。湧き上がってくる。信心は一念の喜愛心っていうのは信心歓喜という、本当の歓喜ですね。歓喜は愛樂、共愛。本当に喜び愛するという。この愛は煩惱の愛じゃありません。本当の愛です。真実の愛。もう一つ言えば私たちの煩惱の愛も、その愛を本当に煩惱の愛を悲しむ、痛むとき、如来様の愛情という、愛し喜ぶというそういうものがはたらいているのだと、そういう展開が見えてきますね。

私、未だに忘れられないシーンがあるのですが、小さい時に親戚の子どもさん、当時二歳くらいだったと思いますが、夏と一緒に遊んでいたのです。私はその時には学校へ上がる前だったと思うのですが。その子が夏風邪を引いてね、鼻水を垂らしていたのですよ。その姿をどこかからお母さんが見ていると、「○○ちゃん、また鼻を垂らしているのね」って言って、お母さんが抱き上げ

て、鼻汁を舐めたのですよ。実においしそうに舐めたのです。私はぽかんとして見とれていたと思うのです。その時には私にはおふくろがおりませんでしたからね。お母さんって、いいものだなあというふうな、強烈な印象が残っております。そのお子さんはですね、そういうお母さんとの優れた大事な愛情の中で育ちながら、何年か後に亡くなられました。お母さんの悲しみは非常に深いものがありました。私たちが育つということは子どもの鼻汁を舐めることも厭わないようなそういう愛情によって育って来たのではありませんか。

それは人間の煩惱ということと言える。何故かならば、自分のお腹を痛めた子どもの鼻汁は舐められるけれど、ちょっと憎たらしい友だちのお子さんの鼻は汚くて舐められたものじゃない。そういうものじゃありませんか、人間は。私たちが育ったってということは親たちの煩惱なくしては育ってきていないと言い切れるのではありませんか。勿論、煩惱だけじゃない、そこに本当の人間に育ってもらいたいというそういう親の縁があるでしょう。本願のおみのに出遇うと、そういう煩惱だらけの中に実はそれなくしては、私は育たなかったということに気が付くと、煩惱の意味が一転してくると思いませんか。これは問いかけです。

能く一念、喜愛の心、まことの心が発るならですね、「不断煩惱得涅槃」という。これが凄いですね。煩惱を断ぜずして涅槃を得ると。涅槃というのは真実の廣大無碍なる目覚めの世界ですね。これはね、中々ね、大変なことなのです。私たちがいわゆる人間に生まれて、ものを思うとか矛盾とか色んなものに出遇って、悩みに悩んできたというようなことがあります。初めに思うのはね、「断煩惱得涅槃」。煩惱を断って、迷いの心を断って、覚り、目覚めの心に至るということなのですよ。

例えばですね、例として適当であるかどうかわかりませんが、高校時代に受験勉強を一生懸命にしようとするときに、机に向かって始めると、私の場合はあれを思い、これを思うということが出てくるのですよ。勉強に手が付かないということがあります。そういうあれを思い、これを思うっていうのは煩惱を断ってね、出来ないこと。そうするとね、水を浴びてみたり、座ってみたりね。真冬でも水を浴びたということもあります。水を浴びるとね、浴びる時はカチカチになる。後、暖かいのですよね。火照ってくるのですね。火照ってくるとまた煩惱が出てくるのです。人間というのは厄介だと思うのですね。

言いたいことは私のことを言いたいものではありません。「断煩惱得涅槃」、煩惱を断って、静かな境地を得ようとする。これはだいたい人間の一般的な思考形態じゃないでしょうか。だけどそうなるのかならないのか。親鸞聖人は悪戦苦闘なされたのですよ。比叡山の二十年の修行、山を下りて法然上人に出遇ったという。これは煩惱を断って涅槃を得ようとするそういう道を断念して、法然上人が説いておられる煩惱具足のまま、阿弥陀の本願の念仏に呼び覚まされて生きる。煩惱を抱えておる身が駄目なのじゃなくして、煩惱を抱えておるということがいかに深く重い。尊いはたらきを持っておるものであるかということをおね、教えられていったと。

私は能発という言葉はですね、本当に能動的な、湧き上がってくると。一念の真実信心がね。信心は獲得する。そういう面がどうしてもございます。信心獲得。獲得という所には全身全霊を挙げて、身命を省みずして尋ね得るといってしょうね。それはそういうそうせずにはおられない心、いのちのはたらきが能発。湧き上がってくると。起こってくると。絶対無限のはたらきからですね、そういうはたらきがね。俗な言葉で言えば、私自身が親鸞聖人の教えに出遇いつつあるということは、自分の心がけとか計らいとかそんなものじゃなくして、人間の存在自身、私自身のいただいたいのちの一番深い所に脈々とはたらき続けてきたそういう宗教心。止むに止まれない。

清沢先生の言葉で言えば、「人心の至奥（しおう）より出づる至盛の要求の為に宗教あるなり」。そういうものによって本当に出遇うことが出来たという。そこに能発という。これは非常に深い意

味があります。そういう能発ということが、「不断煩惱得涅槃」、煩惱を断ぜずして涅槃を得る。絶対無限のはたらきの中に、生かされる身となるという。

私はこの能発という言葉をいただくとですね、そこに信受という。南無阿弥陀仏の名号をこの身の上に、いただく。いただくということは本願力のはたらきに遇うということです。本願力のはたらきに遇うと、この身の事実が本当に自覚していただくことができる。そこから能発という、立ち上がっていける力、そういうものをいただくことができるのであるということ、教えられつつあるわけです。

だから主体性とか自立性とか能動性ということも非常に大事な課題ではありますが、それはやはり信心をいただくと。能く一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るといふ。大きな人生の目覚め。大涅槃の覚りをこの身にいただくという。

清沢満之先生の言葉をいただくなれば、「自己とは他なし、絶対無限の妙用（みょうゆう）に乗托して、任運に法爾に此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり」。妙用というのは絶妙な、人間の理知分別では量れないようなものです。用というのははたらきですね。絶対無限のはたらきに乗托して、そこに身を任せると。いのちの営み、はたらきに任せる。この境遇は今のですよ。落在というのは落ちていると書きますが、しっかりと大地に立っている。そういう姿ですね。

生まれてこない方が良かったと思った人間がね、出遇ってみるとなんて尊いいのちをいただいたかと。初めて私が私として全力を尽くして、如来の大いなるはたらきに任せて、乗托して生きていくことのできる道が開かれた。こういう大いなる道が開かれたと。そういうことがね、能く一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るといふような、大信心が開く本当の利益ということが歌い上げられて、この後に続いて歌い上げていくのであります。今日はその初めの所でありませうけれども。時間が長くなりましたので、私のお話は終わりにさせていただきます。後は質問や感想等、お聞かせいただきたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。